

人間とは何か - 『ハムレット』が現代に語るもの Significance of Human Being in *Hamlet* and Paradigm Shift

毛利 雅子

MOURI Masako

Was Shakespeare's play *Hamlet* intended to be merely entertainment or did Shakespeare intend it to convey a deeper message about the human condition? Was Hamlet merely an indecisive young man, or was his role used to illustrate the vulnerability of humans in their desperate search for a greater meaning to life? This paper analyzes such issues within the context of the play and extrapolates to the significance and role of humanity in its present condition.

1. はじめに

Shakespeare 作の『ハムレット』、それは現代に何を語っているのでしょうか。Hamlet は優柔不断、迷いがちといった惑う青年像が強く、なかなか決心がつかないといった人物を評するのにハムレットという単語が用いられることも、日常生活ではよく耳にする現象である。が、作者は果たして本当は何を思っていたのだろうか。Shakespeare がこれだけの大作をして、単に優柔不断なだけの青年を描きたかったとは考えにくい。ここでは、Shakespeare が Hamlet の存在を通して、何を我々に語っているかを考察したい。

2. 「人間」ハムレット

全編を通して、Hamlet は確かに意思決定が遅かったり心に迷いを持ったが故の言葉で周囲を傷つけたりして、表面的に見れば単なる優柔不断な存在に見える。しかし、これは Hamlet の誠実さを表現しているのではないだろうか。つまり、誠実であるがゆえに短絡

的なことは言えない、誠実であろうとするが故に迷いに迷い、自分にとって一番誠実であるべき答えを出そうと常に苦悩している。そしてそのため、思考が続くなかでの発言は着地点がないままの言葉ゆえに、えてして、そして Hamlet の意図とはかけ離れたところで、人を傷つけてしまっているのではないかと思われる。その思索の中での例として、人間の素晴らしさを Hamlet はこう語っている。

**What a piece of work is a man! How noble
in reason! how infinite in faculties! in form and moving, how
express and admirable! in action, how like an angel! in
apprehension, how like a god! the beauty of the world!
the paragon of animals! (2.2.301-305)**

それにまた、この人間とはなんたる自然の傑作か、理性は気高く、能力はかぎりなく、姿も動きも多様をきわめ、動作は適切にして優雅、直観力はまさに天使、神さながら、この世界の美の精髓、生あるものの鑑、それが人間だ。¹

ここで noble という単語を使用して、人間の存在を讃えている一方で、

**To be, or not to be – that is the question ;
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing end them? (3.1.56-57)**

このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ。どちらがりっぱな生き方か、このまま心のうちに暴虐な運命の矢弾をじっと耐えしのぶことか、それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、闘ってそれに終止符をうつことか。²

と、生身の人間を讃える場合にも、そして死を予感させるように悩む場合でも、noble という単語を使っている。これは一種の矛盾のようにも思える。確かに矛盾かもしれない。

が、一方で深い思索の中で、人間とは生死に関わりなく noble な存在だと考えていたのではないだろうか。またそれを支える根源を探っていたのではないだろうか。つまり、表面だけ見れば自己矛盾、優柔不断と思えるような発言だが、思索の途中で思い悩む吐露がこうした形で登場してきたと考えることも可能であろう。常に自分に誠実であろうとするが故に、彼にとって誠実な noble とは何なのかを描き出そうと模索している姿がここに垣間見られるのである。

また Hamlet は、自分自身の中のみならず外に向かっても、人間の存在、自分の存在を問うような性格、つまり哲学的思想家とも言えるであろう。父の死、そして父の亡霊と遭遇しこれまで回避することが可能だった葛藤を経験することで、人間として脱皮する一方で、人間、生あるものの儚さ、脆さを実感、そして自らの存在意義を問う。それは、亡父に対して、義父（叔父）に対して、母に対して、友人に対して、そして恋人に対してと、あらゆる局面で自分の存在意義を問う形を取っている。これを Hamlet に語らせることが、作者の意図だったのではないだろうか。

3. 「存在」への問いかけ

存在への問いかけという点では、河合祥一郎氏が『ハムレット』は study of Being, すなわち「存在」の問題を追及した作品であるといわれる。³と述べている。またさらに「主体の問題とは、この場合、自我（ego）ないし存在（being）の問題と言い換えてもいい。」⁴と筆者自身言い換えており、時代を大きく反映していることが伺われる。この点を検証するには時代考証が必要となるが、この点については Hamlet が書かれた時代は「すべてが混沌とした変動の最中であって、自我を真摯に見つめ直すことが急務となったのだ。それを最初に劇の形で表現したのが、『ハムレット』だと言ってよいだろう。」⁵と河合氏が締めくくっている。つまり、誰もが人間、自らの存在を振り返らざるを得ない時代を経験していたのである。またその思索の中心ともいえる人間の存在について、Hamlet は前述したように noble という言葉を用い、声を高らかにして謳っている。

しかしその一方で、Hamlet は人間の持つ脆さもこう語るのである。

What a man,

In his chief good and market of his time
 Be but to sleep and feed? A beast, no more!
 Sure he that made us with such large discourse,
 Looking before and after, gave us not
 That capability and godlike reason
 To fust in us unus'd. Now, whether it be
 Bestial oblivion, or some craven scruple
 Of thinking too precisely on th' event –
 A thought which, quarter'd, hath but on part wisdom
 And ever three parts coward – I do not know
 Why yet I live to say 'This thing's to do!, (4.4.33-44)

食って寝るだけに生涯のほとんどをついやすとしたら、
 人間とは何だ？ 畜生と変わりがないではないか。
 人間に前後を見きわめる大きな力を授けた神は、
 その能力、神にも似た理性を、使わないまま、
 かびさせようとしてお与えになったのではあるまい。
 ところがこのおれはどうだ、畜生のもの忘れか、
 それとも事のなりゆきをあれこれ考えすぎでの
 臆病なためらいか、そう、考える心というやつ、
 もとも4分の1は知恵で、残りの4分の3は
 臆病にすぎないのだ、いずれにしるおれにもわからぬ、
 「これだけはやらねば」と言いつつのめのめと暮らす⁶

ここでは、動物としての人間、理性を持った人間、そして感情に揺れ動く人間を描き出し、人間の存在に関わる大きな根幹を提示しているのである。さらに人間の存在の儚さは、ヨリックの髑髏を目の当たりにして、次のように描きだされていく。

No, faith, nor a jot ; but to follow him thither
 with modesty enough, and likelihood to lead it, as thus :

Alexander died, Alexander was buried, Alexander returneth
to dust ; the dust is earth ; of earth we make loam ; and
why of that loam whereto he was converted might they not
stop a beer-barrel?

Imperious Caesar, dead and turn'd to clay,
Might stop a hole to keep the wind away.
O, that that earth which kept the world in awe
Should patch a wall t' expel the winter's flaw! (5.1.199-208)

いや、そうではないぞ。ごく控えめに考えていっても当然そうなる。つまりこうだ、アレキサンダーが死ぬ、埋葬される、塵と化す。塵は土だ。土からは粘土が取れる。となれば、アレキサンダーのなれのはての粘土で酒樽の栓が作られぬともかぎるまい。

かつては世界に君臨せしシーザーも
死してはあわれ一片の土くれと貸し、
かつては天下を畏怖せしめし帝王も
いまは壁穴ふさぎ北風防ぐ身となる。⁷

と、どんなに偉大な人間でも最後は土に還る、つまり人間の存在の儚さを感じている。この土やちりに還るという考え方は、『創世記』にもこのように描かれている。

You will have to work hard and sweat to make the soil produce anything,
until you go back to the soil fro which you were formed. You were made form
soil, and you will become soil again. (Genesis 3.19)⁸

あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る。(第3章19節)⁹

そうかと思えば、人間の存在意義について考えると同時に、考えても仕方がない、というような運命論者的思考も感じさせる言葉が登場する。これは河合氏が「運命の門が開く

ときには直ちにそこへ飛びこむ用意をしておくこと（"the readiness is all", 5.2.24）が重要なのだ。「覚悟が全て」とは、自らの能力をすべて発揮して機敏に動く「用意ができてい
る」という意味である。」¹⁰と語っており、それが以下のような Hamlet 自身の言葉とな
って表面化してくる。

Not a whit, we defy augury : there is a special
providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not
to come ; if it be not to come, it will be now ; if it be not
now, yet it will come – the readiness is all. Since no man
owes of aught he leave, what is't to leave betimes? Let be. (5.2.211-215)

その必要はない。前兆などいちいち気にしてもはじまらぬ。雀一羽おちるのも神
の摂理。来るべきものは今来ればあとには来ない。あとで来ないならばいま来る
だろう、いまでなくても必ず来るものは来るのだ。何よりも覚悟が肝要。人間、
するべきいのちについてなにがわかっている？ とすれば、早く捨てることにな
ったとしても、それがどうだというのだ？ かまうことはない。¹¹

これは以下、『マタイによる福音書』に基づく語りなのである。

For only a penny you can buy two sparrows, yet not one sparrow falls to the
ground with out your Father's consent. (Matthew 10.29)¹²

二羽のすずめは1アサリオンで売られているではないか。しかもあなたがたの父
の許しがなければ、その一羽も地に落ちることはない。(第10章29節)¹³

つまりここから伺われるのは、用意が必要であるということ、また神の前において人間
は覚悟が必要であり、また神の意思には逆らえないという運命論的思考ではないだろうか。
神の定めた運命に、人間は逆らうことができない。それゆえ、人間には覚悟が必要、用意
が必要ということであり、それはとりもなおさず神の前には人間の存在は余りにも脆いと
いう事実でもある。そしてこの重く厳しい事実を、遂に Hamlet はこの段階に至って悟っ

たのかもしれない。

4. 人間とは何か

ギリシャ哲学の時代から人間の存在については、多くの哲学者がさまざまな論を展開してきたが、このルネサンス期のイギリスはまさにパラダイムシフトの時代だった。エリザベス女王の治世により、イギリスは先進国として大きな発展を遂げたが、それも1603年の女王崩御によって情勢が大きく変わっていくこととなる。つまり福田・菊川氏の述べるように「シェイクスピアがグローブ座を中心に活躍していた頃は、社会全体になんとなく憂いが漂い始めていたと言われている。」¹⁴ 状況下で、社会が大きく変革していく時代だったのである。それはまた「社会的繁栄がもたらす爛熟と、時代の境目を迎える期の重さ。世紀末であった。」¹⁵ と論ぜられ、世紀末気分の中で人々は余計に自分自身の存在、人間の存在という究極の、そして永遠のテーマを求めていたのかもしれない。こうした動きが出てきた理由は、単なる人々の気分だけの問題ではない。福田・菊川氏が「エリザベス朝の末期は、時代がゆっくりと近代に向けて変化していく、その萌芽の時期でもあった。」¹⁶ と指摘しているが、これはイギリスが「清教徒の動向と海外交易問題」¹⁷ にさらされていたということを示している。特に海外交易問題においては、「この頃からその後、数世紀に渡って続く対外抗争を開始しつつ」¹⁸ あり、「歴史的には、イングランドは海外領土を獲得して強大な大英帝国を築き上げていく。」¹⁹ 時代、更には「女王は特権を与えて、1600年に会社を設立」²⁰ し、「会社は近代資本主義が発達する19世紀に至るまで、2世紀間にわたり、イギリス対外政策の中で大きな柱となった。」²¹ のである。つまり、イングランドはこれまで内政にばかり目が向いていた時代から、いきなり世界の潮流に放り込まれたのである。また小田島氏いわく、「世の名が乱れ（この時期、1603年のエリザベス1世の死をはさむ数年は、イギリス・ルネッサンスが頂点から下降しはじめる転換期であった）秩序と見えていたものがもろくも崩壊するか、あるいは一個人がそれまでの全体験を一挙にくつがえすような衝撃を受けるかすると、人間の内部にも同様の崩壊現象が起こり、それまで行動基準となっていた価値体系はたちまち消滅して、善悪の見定めがつかなくなる。」²² と解説しているように、海外での領土獲得戦争、資本主義の登場への道筋、清教徒革命の予感など、近代国家への道程においてそれまでの価値観が急激に変わっていく時代だったのである。そんな時代のうねりに比べた余りに小さき存在としての狭間にあって、

おそらく多くの人々が人間自身の存在の大きさについて憂いを感じのではないだろうか。と同時に、いくら人間の存在について考えたとしても、それは全て神の意思、神の決定の前には何も叶うものがないという、反目しているようではあるがこれもまた人間の存在を定義づける思考を登場させることで、作者は大きな問いを投げかけたのかもしれない。

しかしこれは転じてみれば、現在も当時のイギリスの近代化、パラダイムシフトの時代に負けないくらい、いやそれ以上の大きな変革のうねりが世界を巻き込んでいるわけで、『ハムレット』が提示したテーマはやはり普遍的、そして永遠に答えの出ないテーマと言えるのではないだろうか。

一人の人間としてよりも国家の存在として生きなければならなかった王子としての環境、肉親や愛する人を失った悲しみ、部下に裏切られた辛さ、母の愛情を存分に受けられなかった孤独感、余りに多くのことをしかも短期間に Hamlet が経験するプロセスを通して、作者は現代にも通じる「人間とは何か？」という壮大なテーマを投げかけている。

註

-
- 1 ウィリアム・シェイクスピア(小田島雄志訳) 『ハムレット』 白水Uブックス 1983. p.90
 - 2 同上 p.110
 - 3 高橋康也・河合祥一郎 編註 『大修館シェイクスピア双書 ハムレット』 大修館 2001. p.30
 - 4 同上 p.30
 - 5 同上 p.33
 - 6 ウィリアム・シェイクスピア(小田島雄志訳) 『ハムレット』 白水Uブックス 1983. p.174
 - 7 同上 p.216
 - 8 *Good News Bible – Today's English Version*, American Bible Society, 1978. p.4
 - 9 日本聖書協会 『旧約聖書』 1955年改訳 p.4
 - 10 高橋康也・河合祥一郎 編註 『大修館シェイクスピア双書 ハムレット』 大修館 2001. p.41
 - 11 ウィリアム・シェイクスピア(小田島雄志訳) 『ハムレット』 白水Uブックス 1983. p.233
 - 12 *Good News Bible – Today's English Version*, American Bible Society, 1978. p.14
 - 13 日本聖書協会 『新約聖書』 1954年改訳 p.15
 - 14 福田陸太郎・菊川倫子 『シェイクスピア』 清水書院 1988. p.139
 - 15 同上 p.139
 - 16 同上 p.140
 - 17 同上 p.139
 - 18 同上 p.140
 - 19 同上 p.140
 - 20 同上 p.140
 - 21 同上 p.140
 - 22 小田島雄志 『小田島雄志のシェイクスピア遊学』 白水Uブックス 1991. p.155

参考文献

- 小田島雄志 『小田島雄志のシェイクスピア遊学』 白水Uブックス 1991.
- 斎藤衛 『シェイクスピアと聖なる次元 材源からのアプローチ』 北星堂書店 1999.
- 笹山隆編 『ハムレット読本 作品をめぐる評論と創作』 岩波書店 1988.
- ウィリアム・シェイクスピア(小田島雄志訳) 『ハムレット』 白水Uブックス 1983.
- ウィリアム・シェイクスピア(福田恒存訳) 『世界の文学1 - シェイクスピア』 中央公論社 1963.
- 柴田稔彦編 『対訳 シェイクスピア詩集 イギリス詩人選(1)』 岩波書店 2004.

高橋康也（笹山隆編） 『橋がかり 演劇的なるものを求めて』 岩波書店 2003.

高橋康也・河合祥一郎 編註 『大修館シェイクスピア双書 ハムレット』 大修館 2001.

太宰治 『新ハムレット』 新潮文庫 1974.

福田陸太郎・菊川倫子 『シェイクスピア』 清水書院 1988.

S・マークス著（山形和美訳） 『シェイクスピアと聖書』 日本基督教団出版局 2001.

三好弘 『ハムレット 正義と愛』 公論社 1976.

宗方邦義編註 『シェイクスピア名場面集』 北星堂書店 1979.

日本聖書協会 『旧約聖書』 1955年改訳

日本聖書協会 『新約聖書』 1954年改訳

Good News Bible – Today's English Version, American Bible Society, 1978.

Jenkins, Harold *Hamlet*, Methuen, 1982.

Shakespeare, Williams (Edited by T.J.B. Spencers) *Hamlet*, Penguin Books, 1980.

参考映画

Hamlet, Rank Film Distributors Limited, UK, 1948.

(Produced and Directed by Laurence Olivier/Starring Laurence Olivier as Hamlet)